

## まえがき

僕は生態学者である。生態学とは生物学の一分野で、生物が周囲の環境のなかでどのように生きているかを考える学問だ。ほかの生物学とは違って、生物単体ではなく、環境のなかでの生物の生きざまを考えるのが生態学の特徴といえる。ここでいう「環境」には、生物が暮らす場所の気候や地形などに加えて、ほかの生物の存在も含まれる。たとえばアフリカのシマウマにとってみれば、自分を食べようとするライオンがいる環境といない環境では、暮らし方が大きく異なるだろう。同時に、あるシマウマにとって自分の隣にいるシマウマは、あるときは群れで天敵を警戒したりする仲間であり、別のときは限られた量の食べ物を奪い合うライバルである。このように、生物にとっての環境とはいろいろであり、僕ら生態学者が考えるべきこともまた多いのである。

人間という生物にとっても、環境は大事だ。人間が快適に暮らすには良い環境が必要な一方で、人間は環境を破壊したりもする。人間の数が増えて、また人間の技術が進歩することで、人間はどんどん自然環境を変えていく。「21世紀は環境の世紀」といったりするように、近年環境問題が叫ばれているのも道理だ。

環境に良いことを世間では「エコ」という。エコとはエコロジーの略だが、エコロジー (ecology) とはそもそも生態学のことを指す。本来環境問題を考える学問は、環境学または環境科学 (英語では environmental studies や environmental science という) なのだが、どうも世間ではエコと叫びたがる。これは日本だけでなく英語圏で

も同様だ。たしかに、環境にやさしいことをいうときに「エンバイロンメントフレンドリー」なんて言葉じゃまどろっこしい。「エコフレンドリー」のほうがしっくりくるのもうなずける。

しかし、世間で環境がらみの話題が「エコロジー」とくくられてしまうと、本来の意味のエコロジー、つまり生態学が専門の僕らも、環境問題について何らかの貢献を求められているような気持ちになってくる。そして生態学を研究していると、必然的に環境のことを意識する機会が増えてくる。そんなとき生態学者は、ほんやりと「自分は環境学の専門家でもある気がする」みたいな意識をもってしまうのではなく、しっかりと環境学の基礎を身につけたいと思うのである。環境学は生態学とは違った学問であり、生態学者が環境学をきちんと学んでいるとは限らないのである。

こんなわけでこの本では、自責の念も込めつつ、「自然や生き物を愛する人が知っておくべき環境学」を語っていきたい。環境問題を考えるときに大事なのは、「視野」だと思う。生態学など理系の科学は物事の「部分」に着目し、研究をつきつめる。だから生態学者は、自分が関心をもつ生態系や特定の生物については詳しいものの、地球全体を見渡して考えなければならない問題の理解や、多くの視点を総合する必要のある問題にあまりなじみがない。一方で環境学では、「全体」を理解するための視野をととても大事にする。これまで、「自分は自然が大好き」「自然についてよく知っている」と思っていた人にこそ、この本を読んでいただきたい。もちろん、環境学に入門してみたいという人も大歓迎だ。